



## 卷頭言

### 年頭にあたり —PLASMA CONFERENCE 2011とプラズマ科学連合—

プラズマ・核融合学会 副会長 藤 山 寛

新年あけましておめでとうございます。今年が皆様にとってよい年でありますように。いきなりですが、学会の使命は主に3つあると考えています。その1はその分野の研究開発の最新動向を学会誌（あるいは機関紙）で会員に伝えること、その2は研究成果の発表の場（年会、講演会、研究会などのPresentationと論文誌によるDocumentation）を提供すること、そしてその3は将来その分野を背負う優秀な人材の育成、研究推進に必要な政策の提言です。そのため、学会の主要事業は、

- (1) 学術集会、講演会などの開催による学術振興事業
- (2) 学会誌、論文誌、資料等の刊行・出版事業
- (3) 教育、研究助成など人材育成・研究推進事業

に分けられます。ここでは、(1)の学術集会、講演会の果たす役割について考えてみます。国際社会での活躍をめざす科学者・技術者のために書かれた中村輝太郎氏の「英語口頭発表のすべて」（丸善、1982年）に、国際会議出席の目的として以下の諸点が挙げられています。

- ・各国の研究者から直接その研究の説明を聞き、世界の進歩の様子をよく見ること
- ・自らの研究成果を理解してもらい、アピールすること
- ・各国の研究者と知り合い、知己を得ること
- ・外国の研究の進め方、研究者の考え方を理解し、国際的な広い視野をもつこと
- ・狭い島国から出て地球上の1点に立って世界を実感し、外国人たちと地上の同胞としての親近感を実感すること

まさしく「学ぶべき見本が外部にあり、世界標準をキャッチアップするのが学ぶこと、と信じる辺境人としての日本人」（内田 樹：日本辺境論、新潮新書、2009年）の研究者版ですが、その問題はさておき、若い研究者や学生は、国際会議だけでなく国内会議もほぼ同様の目的を持って出席されていることでしょう。しかし、あまりにも学会が多いのではないか、と最近とみに感じています。「学会や研究会に追われて研究する時間ががない」と嘆く研究者の多いこと、これでは本末転倒ではないでしょうか。

研究の進展により取り扱う分野が広がり拡大拡張を続ける学会がある一方で、設立時の熱気が冷め団塊世代の高齢化も拍車をかけて衰退していく学会、また、新設、細分化、深化を志向して先鋭化していく学会もあります。現在、国際会議、国内会議ともに新旧入り交って“乱立”しているといつても過言ではないでしょう。

その学会の会場では、発表内容について喧々諤々の活発な議論が行われているのでしょうか？それならばよいのですが、私の知る多くの学会、とくに支部学会では学生の研究発表の場、つまり若手育・成教育の場と兼ねており、そこでは、議論をしても無駄とばかりに質問が出ない“草食系学会”となっているのが実情ではないでしょうか。その惨状は多くの学会でも同様らしく、会場での討論を活性化するため、座長や奨励賞審査委員にフェロークラスのベテラン研究者を招聘することが検討されています。フェローの義務として、学会の会場で研究成果をきちんと評価してもらう、ということです。研究の間違い、勘違い、勉強不足を的確に指摘する一方で、素晴らしい研究に対しては惜しみなく褒める、適切なアドバイスを贈る。研究内容をきちんと正しく評価しエンカレッジできる研究者がその会場にいることが、学会セッションにとってもっとも大切なことでしょう。それは先日の第27回札幌年会で証明されました。



いつも同じメンバー（仲間うち）で議論していると、次第に緊張感が薄れていくのは当然の成り行きです。そこで、各学協会に分散して展開されているプラズマ科学の研究活動を、総合的に把握し、21世紀におけるプラズマ科学の新たな発展を図るとともに、各学協会におけるプラズマ科学の研究活動を推進することを目的として、プラズマ科学シンポジウム(Plasma Science Symposium: PSS)が、2001年、2005年、2009年の過去3回開催されました。2009年2月に名古屋で開催された第3回PSSの会期中に、PSSの将来構想を検討するため関連学会の会長クラスの代表者に集まってもらい、過去3回の成果を総括致しました。その結果、開催意義が認められ、今後も継続開催することが決まりました。ただし、開催のやり方については、今後、より良い方法についてさらに検討すべしとの意見が多数を占めたため、まずはプラズマ・核融合学会、応用物理学会、日本物理学会から運営委員を出してそのやり方を検討することになりました。この運営委員会で種々検討された結果を要約するならば、多すぎる学会（年会、講演会、シンポジウム、研究会等）ができるだけまとめて合同開催し集中討議しよう、そして国際化をめざそうということに尽きます。それがPLASMA CONFERENCE 2011(略称 PLASMA2011)であり、本学会が幹事学会となって今年11月に金沢で開催される計画です。異学会間のCollisionによるプラズマの基礎学理と応用技術のCollaborationとFusionを大いに期待したいものです。

家族や仲間と家で過ごしたがる草食系から、時には血が飛び散ることもある緊張感漂う他流試合の場（肉食系学会）を志向するのは、やはり科学技術は世界で勝負すべきと思うからです。そのためにも、多数のプラズマ関連学協会から構成される「プラズマ科学連合」組織を作り、プラズマコミュニティ全体の振興・発展をめざした諸事業（例：「未来をつくるプラズママップ」の制作など）を通して、プラズマ学界の総力を挙げた研究プロジェクトの推進や優れた若手研究者の育成・確保などを図ることが重要です。

PLASMA2011での会員皆様の“肉食系研究者”としてのご活躍、飛躍を心から期待しています。